レッスン：SPA/No.1

テーマ：前書き＆概要

SPA/NO.1/DOC\*PYR/O1/.KE5

私の姉妹・兄弟たち、スピリット、光、火の子供たち。私たちは常に主、絶対、神の聖性に抱かれています。

自分自身、創造界および宇宙における自分の役割を理解したいという人間の願望の結果、時間の経過のなかで多くの宇宙論が出てきました。存在する多くの宇宙論は、多くの様々な神秘家による文書を深く研究し、自分自身の理解というフィルターを通じてそれらを比較・分析して新たな宇宙論を形成したものです。それらの宇宙論は必ずしも経験に裏打ちされた知識の結果ではなく、むしろ「研究」であり一般に文章という形で提示されています。時の経過に耐えて残っている真摯な宇宙論は今でも人類に多くを提供していますが、大体それらは真のエピグノシス、同調、経験的知識によるものであり、インナーセルフの本質を真に表現している結果として、口で伝えられたものです。

口を通して提示されたそれらの宇宙論は後になって弟子たちによって記録されたのですが、記録した人々の理解というフィルターを通しているので、必ずしも全てが正確に伝えられたわけではありません。その結果、同じ宇宙論のなかでも様々な多くの解釈を目にすることがあります。

エレブナによって提供されるものに関しては、過去にも述べたようにそれは経験による知識、同調、経験を通じた探求の結果です。この知識はまず最初にエレブナのいくつかのセンターにおいて口を通じて与えられ、レッスンの内容について触れるために後にそれをタイプ起こししたものが、キプロスにいる探求者たちに配られました。ギリシャ語の口述文は、その時レッスンに参加した個々の探求者たちのために、個々のレッスンで口を通じて与えれた内容がほとんどそのまま記録されています。

国外の会員向けのエレブナのレッスンは次のようにアレンジされていることをお知らせしておきます。

シリーズ 1A-24A は宇宙論の一般的背景をカバーし、新しい探求者たちができるだけ速やかにこの道の精神に入ることができるように、多くの年月の間に与えれれた内容を編集したものです。

シリーズ “MAC”1M-36M もまた一連のレッスンの内容を編集し、“A”シリーズで提供された宇宙論の基本的背景の上により詳しい内容を加え、同時に宇宙論の新しい側面も加えられています。

シリーズ“SPA”。私たちは今やシンボル、ピラミッド/パーソナリティー、分析、目的を意味する“SPA”という名前のもとに新しいシリーズに乗り出しています。これらのレッスンによって探求者たちは、（＊キプロスの）リマソルにあるストアで行われているギリシャ語および英語によるエレブナのワークにかなり近づくことができます。エレブナのダスカロスによって提示された探求内容の意味、流れ、発展を保つために、オリジナルの口で伝えられた内容をできる限りそのまま編集するようにしています。構文法、および文法的正確さを期していかに真剣に編集しても、編集されたものは全て口を通して提示された内容の意味を歪めてしまう危険性があります。しかし、エレブナは海外の会員の方々のために公用語としては英語を選択していますが、私たちの母国語はギリシャ語であることを覚えておいてください。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　エレブナ

* ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Page2

私の兄弟・姉妹たち、スピリット、光、火の子供たち。私たちは常に主、絶対、神の聖性に抱かれています。

過去において私たちは生命の木、および黙想状態にある絶対存在を示す大きな三角形について述べてきました。その三角形は生命の木の一番上にあります。もう一つ同じような三角形があり、それは汎宇宙的キリストロゴスとしての息子に属する、とも話しました。これら二つの三角形は底辺を共有しており、「父」の三角形は上向きで、息子である汎宇宙的キリストロゴスの三角形は下向きです。二つの同じような三角形があります。

さらに、それら二つの三角形に似ているもう一つの三角形についても説明しました。それは生命の木の一番下にあり、現在のパーソナリティー、生の現象に属します。しかし、一番下の三角形と他の二つの三角形の間には大きな違いがあります。本来ならばこの三角形は他の二つの三角形と同じであるべきなのですが、実際には同じではありません。というのも、この三角形は生の現象としての人間の現れを示しているのですが、無知のなかにある間はその現れはインナーセルフの特質を表現していないからです。

生の現象としての人間は、この三角形を他の二つの三角形と同じものとするためにワークをし始めるでしょう。この段階では、人間は「父」のアイコンです。しかし、人間は父の似姿として父の特質を表現する必要があります。しかし、この三角形が他の二つの三角形と同じようになれば、現在のパーソナリティーは「父」の特質を完全に現すことができるのでしょうか？

現在のパーソナリティーがこの三角形を他の二つと完全に同じにする段階に到達すれば、その人は現在のパーソナリティーの自己実現に到達したことになる、と述べました。しかし、現在のパーソナリティーは最内奥のセルフ（Innermost Self）の特質を完全に表現するわけではありません。

生命の木におけるそれら三つの似たような三角形のほかに、他の段階の現れがあります。最も重要な段階は、生がスピリットとしての最内奥の特質を完全に表現している段階です。それらの諸世界とは魂のセルフ・エピグノシスの諸世界、つまり四つのヘブンです。

しかし、生命の木の上でそれらの諸世界はどこにあるのでしょうか？それらは魂のセルフ・エピグノシスとしての生の現れがある長方形の中にあり、そのポジションにおいて魂のセルフ・エピグノシスは永遠のパーソナリティーとして表現されています。

次の段階は誰も、たとえ魂のセルフ・エピグノシスでも近づくことは全く不可能です。それは、ロゴス的下降において魂のセルフ・エピグノシスを現わすためにモナド・セルフが聖なる黙想をしているレベルです。四つのヘブンとは存在の諸世界、生それ自体の諸世界、元型、法則、原因の諸世界、そこでは原因と結果はイデアとしてのみ存在します。言い換えれば、原因は効力としての結果を起こしていません。

魂のセルフ・エピグノシスは下への下降によって永遠のパーソナリティーに変わり（実際には魂のセルフ・エピグノシスは変化しませんが、勉強のために便宜上このように言います）、実存の諸世界の中、生の現象の諸世界のなか、いわゆるノエティカル界、サイキカル界そして粗雑な物質界という三つのヘブンのなかにおいてそれ自身の微細なスパークを投射します。ですから、生それ自体の四つのヘブン、現在のパーソナリティーの三つのヘブンがあります。これは創造の諸世界におけるロゴス的現れと結びついています。

さて、生命の木のもう一方の側は聖霊の各サイドです。上の長方形の一番上にはスピリット・モナドが集まっています。スピリットであるそれらのモナドは、聖霊的現れの両手として創造を手助けします。それは絶対存在のダイナミックな現われです。長方形の一番上のポイントから次のポイントまでは、様々なアークエンジェルのオーダーにおける現れの分類です。このポジションから、各モナドセルフはそれらの個別の黙想の結果として、様々なアークエンジェルのオーダーに入り、創造界における特定のアークエンジェルのオーダーの特別な仕事において奉仕します。このポジション（上の長方形の下側の左の円）において、仕事のそれぞれの側面を受け持つ様々なアークエンジェルのオーダーがあります。動物界、植物界という他の生命界が顕現するのはこのポジションです。それらもアークエンジェル的黙想の結果です。

Page3

二番目のセンター（円）から三つ目の下の円までは、アークエンジェルのオーダーは生それ自体の中で奉仕しています。左側の一番下の円から下方では、様々なアークエンジェルのオーダーが実存の諸世界に入り、人間のイデアに奉仕します。

生のロゴス的現れと生の聖霊的現れの間には違いがあるでしょうか？

生それ自体としての魂のセルフ・エピグノシスは、スピリットとしての最内奥のセルフの特質を完全に現しています。一方、生の聖霊的現れは、様々なアークエンジェルのオーダーにおける様々なアークエンジェルを通じての現れです。

それでは、生それ自体の諸世界において、魂のセルフ・エピグノシスとアークエンジェルの間に何か違いがあるのでしょうか？両方の現れは共に完全に神の黙想内にあり、それらの黙想は質的に神の黙想と全く同じです。

しかし、違いがあります；魂のセルフ・エピグノシスは全てのアークエンジェルのオーダーが表現しているもの全てを表現することができます。なぜなら、そのポジションにおいて魂のセルフ・エピグノシスにはいかなる制約あるいは境界もないからです。しかし、アークエンジェルのオーダーのセルフ・エピグノシスには制約があります。アークエンジェルのオーダーは生それ自体の世界においてさえ、プログラムされたセルフ・エピグノシスを表現しています。これが魂のセルフ・エピグノシスとしての生とアークエンジェルとしての生の大きな違いです。

アークエンジェルの現れは意識としては決して境界・制約のなかに入ることはありませんが、魂のセルフ・エピグノシスのロゴス的現れは、魂がそれ自身の微細な部分を放射して現在のパーソナリティーとして転生する際には制約・境界の中に入ります。

生の現象において、意識は制約のなかに入ります。より正確に言えば、無知のなかに入るのです。私たちが無知というとき、それは下降する前の源を覚えていない、という意味です。ですから、生の現象としてのロゴス的現れにおいては、意識が制約のなかに入り、聖霊的現れにおいては、創造界における特定のオーダーの特定のワークに応じてプログラム化されたセルフ・エピグノシスがあります。

以前のレッスンにおいて、“太陽”が彼（He）に属する長方形について述べました。私たちは「彼に」という言い方で何を示していたのでしょうか？それは、この世界に来るすべての人間を照らす光、全ての人間を転生させる神のスパークを示しています。このセンターはキリストロゴスとしての「息子」、あるいはもっとはっきり言えば「汎宇宙的キリストロゴス」に属しています。

魂のセルフ・エピグノシスとしての人間がそのポジションに達すると、その人は自分は神と同じであると言うことができるのでしょうか？魂のセルフ・エピグノシスとしての人間はもはやアイコン(icon)ではなくなり、神と同じよう (alikeness)になります。なぜなら、そのポジション（太陽のポイント）はいわゆる「キリスト意識」だからです。

私たちの諸体にはいわゆる意識およびセルフ・エピグノシスの諸センターがあります。確かに、三つの体があります。肉体、サイキカル体、ノエティカル体です。三つの体、三つのセンター、実存の諸世界における生の現象の現れです。

私たちのパーソナリティーの不定形な体の形を作り直すために、それらのセンターについてワークする必要がある、と述べました。太陽神経叢は生命の木における五芒星の位置に対応し、中宇宙的には月に対応します。太陽神経叢にはホワイトブルーの輝きがあり、ハートのセンターはホワイトピンク、そして頭のセンターはゴールデン・イエローです；しかし、多くの哲学においては、これらのセンターは複数色で示されています。なぜグループによってそれほど大きな違いがあるのでしょうか？

Page4

いわゆる超感覚をある程度活性化させた人が他の人々の意識およびセルフ・エピグノシスの諸センターにフォーカスすると、複数色の輝きが見えます…特にハートのセンターにおいて。なぜなら、それらのセンターに調和あるいはバランスがないからです。それら複数色の輝きはその人の感情の状態に従って変化します…特にハートのセンターの色が変化します。

サイコノエティカルなエクササイズで私たちが使用する三つの色は何を意味しているのでしょうか？それら三つの色は、探求者が現在のパーソナリティーの諸体をマスターし、現在のパーソナリティーの自己実現を表現するときに、その人が達するステート（＊状態）を示しています。

現在まで私たちは黒色で囲まれた生命の木を提示してきました。それは超光、近づくことの不可能な絶対存在の無限の静的なステートを示していました。あなた方はそれが正しいと思いますか？本当は間違っています。絶対存在のステートを表現するのに暗い色を用いるべきではありません。なぜなら、黒色は無知および対立する力と結びついているからです。超光はむしろ白色で示されるべきであり、もしできれば強くきらめくような白色によって、人間には近づけないものを示すべきです；この絶対のステートは創造界におけるいかなる生の現れによっても経験できないものです。

色に関するこの誤りは今でも広く行われています。

**質問**

質問：創造界全体が様々なLogii（？）によって組織されています。それはあるLogiiは他のそれよりも大きいということでしょうか？

Ｋ：違います、そうではありません。創造界に奉仕するLogiiがあり、それらは自己実現した魂のセルフ・エピグノシスであり、ロゴス的および聖霊的現れの両方に奉仕します。アークエンジェルも創造界に奉仕しますが、アークエンジェルたちはLogiiではありません。アークエンジェルはプログラムされたセルフ・エピグノシスであり、彼らは決してアウタルキーを去ることはありません。彼らの目的は聖霊的現れに奉仕することだけです。彼らの意識は特定の仕事のみにフォーカスすることができ、他に向けることはできません。そのために、特定の分野を担当する様々なアークエンジェルのオーダーがあるのです。

質問：どのようにして私は永遠のパーソナリティーと接触できるのでしょうか？また、それが永遠のパーソナリティーであって現在のパーソナリティーでないことがいかにしてわかるのでしょうか？

Ｋ：***永遠のパーソナリティーに到達する唯一の方法は、現在のパーソナリティーが最初の磔のステートに到達することです。***

**これは現在のパーソナリティーの諸体をマスターし、自己実現したパーソナリティーを現し、その結果として四面ピラミッドの頂点を完成させることです。無知のなかにある現在のパーソナリティーはピラミッドの床に立つことすらしておらず、ピラミッドの床のさらに下、地下にある「部屋あるいは墓」の中にいます。**

現在のパーソナリティーはその部屋から抜け出て、四面ピラミッドの床の上に立つようにしなければなりません。しかし、そのためには現在のパーソナリティーの三つの体、つまりノエティカル体、サイキカル体、肉体に関する多くのワークが必要となります。**パーソナリティーが四面ピラミッドの中の床に立つことができるようになるためには、現在のパーソナリティーの諸体が一定のレベルまでサイコノエティカル的上昇をする必要があります。**

質問：魂が物質界に降りてくることについては二つの理論があります。一つの理論によれば、それは神の計画であり、進化によって私たちは再び源に戻るということです。二番目の理論は、それは前もって決められた「定められた堕落」である、というものです。もし最初の理論に従えば、私は腕組みして、進化による上昇によって戻るのを待つことができます。しかし「定められた堕落」であるという二番目の理論に従えば、私は追放された者として留まるか、あるいは戻る努力をするかを決断しなければなりません。

Page5

Ｋ：実際、それは堕落ではありません。Holy Monad Spirit-Being（聖なるモナドであるスピリット存在）は自己実現したスピリット存在となるために、それ自身のブレーシス（＊聖なる意思）によって、人間のイデアを通じて現れの諸世界の中へそれ自身の微細な部分を放射します。これを現わすために創造があり、創造は実際に神の黙想の動きであり、この動きのなかにあるものは全て特定の能力によって表現されます。素質的可能性のサイクルは神の黙想のなかにあり、神の計画のなかにあります。しかし、現れとして、特に生の現象の諸世界においては、それは法則それ自身によって与えられた全ての能力を可能性として有しているにもかかわらず、それはまた蓋然的可能性のサイクルの中にあります。しかし、繰り返しますが、それを堕落ということはできません。生の特質を表現する可能性はセルフ・エピグノシスの能力のなかにあり、法則それ自体によって現在のパーソナリティーに与えられています。それはセルフ・エピグノシスの可能性としての能力のなかにあり、神の計画のなかにあります。何であれ神の黙想および神の計画のなかにあるものを堕落とみなすことはできません。むしろ、特別な聖なる目的である何か、と見るべきです。

これらは真理ですが、しかしだからといって、現在のパーソナリティーである私たちが無知という制約から自由になるための努力をすべきではない、道のりを短くするためのあらゆるチャンスを利用すべきではない、という意味ではありません。これら多くのリアリティー、特に転生に関する事実が様々な教会によって隠されてきた理由は、「まだまだこれから先何回も転生していくので、今回は自分が楽しいと思うことをやろう。より良い自分になるための時間はまだまだ先にいくらでもあるのだから」と人間が言わないようにするためです。

質問：…それではアダムとイブが天の楽園から追放された物語は？

Ｋ：もちろん、私たちは今別のフィールドに入ろうとしています。現在のパーソナリティーとして初めて実存の世界に下降したとき、私たちは「楽園の世界」を体験していました。なぜなら、意識はまだ無知に取り込まれておらず、実際私たちはアダムとイブが「ひとつ」になっていたのです。性の分離はなく、サイコノエティカルな諸世界、「楽園」にいました；「ひとつ」のパーソナリティーとしてのアダムとイブは仕事を達成する助けとなる黙想に入る準備ができていました。もし彼らが「楽園に」留まったなら、「私は私である」（I am I）のエピグノシスを達成する目的を持つ下降、その仕事を成就しないことになります。神の黙想の目的全てはモナド・セルフが自己実現を表現することであり、それを達成するプロセスとして、意識は無知のなか、制約のなかに入る必要があるのです。象徴として蛇がありますが、それは「アダムとイブ」というパーソナリティーが仕事の達成に向かうよう誘い込んで刺激するパーソナリティーの英知を示しています。

女性的サイドはパーソナリティーの創造性を意味し、リンゴはパーソナリティーが現されるこの地球を意味しています。この地球上では五つの超感覚の表現が停止し、五感に代わります。もしあなたがリンゴを水平に切ると、どのリンゴでもその中に五芒星が見られます。それは五つの超感覚と五感を示し、リンゴの果肉は地球の四つのエレメントを意味します。

**この動き、運動には一瞬以上の時間はかからないのですが、意識はあまりにも遅く動いているので、私たちは「あー、かくも永い永劫、かくも多くの転生！」と思えるのです。この「時間あるいは無時間」の理解は、パーソナリティーが五つの超感覚を表現するようになるとある程度認識されるでしょう。しかし、「リアリティー」(Reality)と比較したら、それさえ何ものでもありません。**

私たちは常に主、絶対、神の聖性に抱かれています。

EREVNA/SPA/NO1/SYM1/